



故里井陸郎先生遺影

里井陸郎教授の急逝を悼んで

南 波 浩

一九八〇年四月一〇日、この日は、われわれにとって、痛恨極りない、忘れがたい日である。この日、われわれが敬慕してやまなかった里井陸郎教授を、無情にも、憎むべき病魔がこの世から奪い去ってしまった。

里井教授は、わが同志社大学国文学専攻の創設のために奔命献身され、一九五四年四月その設置の後は、その高邁な学識、鋭敏な感受性、天性豊かな文学的資質をもって、国文学教育を推進され、わが国文学専攻に銘記すべき数々の偉大な貢献を遺し、また、その清爽淡泊な人柄によって、専攻の中に、つねに明るく、さわやかな雰囲気醸成し漂わせて下さった人だった。

われわれ同僚の中では、「里井さんは、一番長生きされる人だろう」と言い合っていた。

「一番長生きされる人」という表現には、いろいろのニュアンスがある。

その一は、里井教授は、いっどこで逢っても、澆測として意気軒昂であり、瘦身端麗な風貌が凜然たる風格を發揮し、颯爽たる清風がつねにその身边に漂い、もっとも若々しい男の意気と氣力とを持った人であったからである。

その二は、われわれの中では、もっとも健康に配慮し、西式健康法を実行され、漢法医薬などもよく研究し、われわれ同僚の保健に、つねにねんごろな教示を下された人であったからである。

さらにその三は、人柄があっさりしていて、接する人々には誰にもさわやかな感を与え、少々の失敗にもケロリとして、こだわらぬ磊落な人であったからである。

そのような颯爽たる人であっただけに、その急逝による衝撃と悲嘆とは、筆舌に尽しがたい深刻なものであった。

里井教授は、中世文学の研究者として、

『謡曲文学』（河原書店）

『英訳花伝書』（共著。住谷・篠部出版会）

『謡曲文学—その詩とドラマ—』（笠間書院）

などの名著を公刊されているが、それらは、教授が専門と関わりの深い能楽の修業に若い頃から精進され、観世流片山門下として練磨の結果、「観世流名誉師範」の称号を家元から授与せられた、多年の修業練磨に裏打ちされた、謡曲の評説であり鑑賞であって、他者の追隨を容易には許さぬ、真髓に斬り込んだ深奥なものであった。

四十年にわたる同志社人としての里井さんは、三つ葉のクローバに象徴される同志社の教育精神を深く体得され、知育・徳育・体育を統合し、それを全面的に開花させてゆくことこそ、人間形成の教育の道であることを信念とされて、書齋での研究とともに、他面、祖国日本の将来を担う幼い児童たちの幸せとその健全な成長のために、日本子どもを守る会副会長、京都子どもを守る連絡会々々長、国際児童年京都会議代表委員として、精魂を傾けて活動され、さらに天性のスポーツマンでもあった里井さんは、同志社大学硬式野球部長・新日本体育連盟全国理事・同京都府本部長・京都府スポーツ振興審議会委員等々として、青少年の体育振興、とくにスポーツの民主的振興のために奔命された。

スポーツの民主的振興の運動は、教育運動であり、文化運動であり、民主的な諸運動と深くかかわるものであり、今日の社会的現実の中で、失われつつある人間性と人間連帯とを回復する道である——という信念に発するものであった。

さらにまた、民主的なスポーツマンの理想像は、専門のスポーツへの見識・力倆とともに、すぐれた知性と感性とを併存する豊かな人間性の上に形成されるものであることを主張し、スポーツの民主的な振興運動とともに、文化面の運動にも精力を傾注され、同志社大学能楽部顧問・同志社大学中世文学研究会顧問・大阪府文化祭審査員・人形劇団京芸後援会々々長と

して、民主的文化の振興に尽力されたのだった。

まさに、知・徳・体の統合による豊かな人間形成を目指す、驚嘆すべき活動ぶりであった。

そのような「信念の人」であった里井さんは、その人柄自体、信念に裏打ちされた、毅然たる強さをもつとともに、さわやかな、親近感あふれる、人間味の豊かな人であった。

国文学専攻の学生、スポーツ関係の学生、能楽部の学生はもちろん、里井さんに接した、広く多くの人々が、その人柄に感銘し、誰もが異口同音に「いい先生だったなあ」、「さわやかな、親しみのあふれる人だった」と、敬慕するのをつねに見聞した。

その急逝を痛嘆し、立本寺で行われたお通夜に弔問された人は二〇〇余名、その葬儀に参列された人は一五〇〇余人であった。

通夜を終えて、ふと夜の境内を眺めた時、夜光灯に映えて白く爛漫と咲き誇っていた桜の花が、風もない静かな夜空に、ひらひらと舞い散っていたのが、眼底深く刻まれて、いいがたい感慨に打たれたことだった。

われわれが心底から親しみ敬慕してやまなかった里井さんを亡い、その悲しみがいつまでもいつまでも消えやらぬなかに、やがて早や一周忌が近づこうとしている。しかし、われわれの脳裏に日と共に深く刻み込まれてゆくのは、そのさわやかな、溢れる人間味と、崇高な信念による広範囲にわたる活動の偉大さである。

われわれが、この極らない悲しみをのり超える道は、亡き教授の刻み遺されたその偉大な足跡を銘記し、そのすぐれた志を継承し、それぞれの形で活かしてゆくことであろう。